

春眠
曉を覺えず

茅々齋かちかち 著

李白が「吾は愛す孟夫子（もうふうし）」の詩を孟浩然（もう こうねん）に贈ったのは、開元二十一（七三三）年のこと、李白が三十三歳、孟浩然が四十五歳だった。孟浩然是つとに詩名高く、鹿門山（ろくもんざん）の隠士として知られていた。

中国の古い詩、いわゆる漢詩は、唐代の中頃に最盛期を迎え、代表する詩人は李白（り はく）、杜甫（と ほ）、それに王維（おう い）とされる。その三人が揃って愛すべき先輩と仰いだのが孟浩然であった。

唐以前の南北朝時代は貴族の世で、詩の担い手のほとんどが宮廷に身を置いていた。唐になると、貴族とは異なる新しい階層が勃興し、血筋によってではなく、知力によって天下に名を成そうとした。新しい階層には新しい詩があつてしかるべきだった。

孟浩然是新しい階層に属し、新しい詩を開拓したが、そのような歴史的な流れに身を置くところから詩を発想したのではなかった。少年期には「作ろうと巧むでしょう。だから変なものになるのです」と義理の姉に笑われ、一

族が雇った教師からは巧んで詩を作る技法をみっちり仕込まれた。二十歳を過ぎて鹿門山に隠棲し、詩が自ずと生まれ来る感覚を時として持つようになった。その最初のきっかけを与えたのは張野人（ちょうやじん）という漁夫だった。郷里の風土と周囲の人々に導かれて孟浩然の詩は形作られた。

後に、唐の詩が前代までの詩と確かに異なるようになったのは開元十五（七二七）年であると回顧されたその年の暮れに、孟浩然は不意に長安に現れ、官職を求めて都人を驚かせた。人々は、孟浩然は郷里で詩を作り続けるものと考えていたし、実際に孟浩然を間近に見て、これほど官界と縁遠い人間はいないと感じもした。孟浩然は望みを達せられず、長い旅を経て故郷の襄陽（じょうよう）に帰った。

李白が孟浩然を訪ねたのは、その一年半後だった。李白は二十五歳で故郷を離れてから、各地を旅しつつ官界に入る運動をし、いまだ果たせずにいた。

孟浩然は李白を伴って田園の道を歩んだ。畑を耕す人々が手を止めて会釈し、孟浩然は一人一人の名を呼んで、短く打ち解けた言葉を交わした。川向

うの鹿門山を示し、山中に棲んだ若き日々を語った。終始絶やさぬ穏やかな笑みから、清らかな香りが漂い出るかのようであった。

吾愛孟夫子 私は孟先生を敬愛します

風流天下聞 風流は天下に聞こえ

紅顏棄軒冕 若いころより官人の使う馬車や冠に目をくれず

白首臥松雲 雲の宿る松の根元で白髪になるまで臥して来られました。

醉月頻中聖 月に酔って、「聖人の中（あたった）」といつも隠語で言い

迷花不事君 花に迷って、皇帝に仕えようとしません。

高山安可仰 高い山のような先生は仰ぎ見ることさえできません

徒此揖清芬 清らかな香りにただ敬意を表するのみです。

李白がこの詩を置いて襄陽を去った翌年、孟浩然は再び長安に赴いて官職を求め、やはり失敗した。

二人は、孟浩然四十九歳の春に、長江の中流で再会した。李白はなお浪々の身、孟浩然是揚州（ようしゅう）への旅の途中にあった。黄鶴楼（こうかくろう）

での別れに際し、李白は詩を贈った。

故人西辞黃鶴樓

ふるき友人は別れを告げて黃鶴樓を西にし

煙花三月下揚州

三月の春霞に包まれる揚州へと下ります。

孤帆遠影碧空尽

船の帆がぼつりと青い空の中に消えて

唯見長江天際流

天の果てへと長江が流れるのを見るばかりです。

それから二年後に孟浩然は死んだ。

春眠不覺曉

春の眠りは曉を覚えません

処処聞啼鳥

ところどころで鳥が啼くのが聞えます。

夜來風雨聲

夜中にずっと雨や風の音がありましたから

花落知多少

どれだけ花が落ちたことでしょう。

最晩年に故郷で詠んだこの詩は孟浩然のいかなる心を映すものだったのだろうか。

序章 家は世々儒風を重んず

孟浩然是、唐の永昌元（六八九）年、襄陽に生まれた。明瞭な一つの道筋が用意されていた。

一族の言い伝えによると、遠い先祖はかの孟子（もうし）で、その生地である鄒（すう）や孔子の生地である魯（ろ）のあたりに長らく子孫は住んでいた。いつのころか、何かの事情によつて、西へと移り、数百年の昔に、襄陽の近くに居を定めた。孟子から数えて約千年、孟家の人々は住む場所は変えても、孟子の教えを、親から子、子から孫へと伝え続け、唐の世に及んだ。

浩然の名は孟子が言った「浩然（こうぜん）の気」に由来する。孟子は孔子よりも理想を説くことに純粹で、それだけに孔子よりもさらに世に受け入れられるところとはならなかった。孟子は数多の挫折にも屈しなかった。心に「浩

然の氣」を養うならば、たとえ千万人の敵があるとも我が道は貫けると考えていた。「浩然の氣」とは至大至剛の何ものかで、天地の間に充塞し、心の内にも備わるものだ。

孟浩然が浩然の名を持つのは、孟子から千年を経て、孟子に最も近付くのが孟浩然であると見なされたからだだった。

襄陽は、唐土を西から東に流れる二つの大河、黄河と長江に挟まれたほぼ中間域に位置し、洛陽から見ればほぼ真南に当たり、洞庭湖（どうていこ）から見ればほぼ真北に当たる。西から漢水が流れ来て、町の近くで南東に向きを変え、遠く鄂州（かくしゅう）に至って長江に合する。漢水の流れに乗れば長江下流の江南の地に至り、漢水を遡れば途中で山を越えて蜀（しょく）の地に通じる。北に向かつては洛陽や長安に達する道があり、いわゆる四通八達の地で、乱世には必ず争奪の場となった。

漢の末に、劉表（りゆう ひょう）がここに勢力を張り、曹操（そう そう）に追われた劉備（りゆう び）が逃げ込んだ。劉表はよく遇してくれたものの、居候の身として劉備は髀肉の嘆をかこたねばならなかった。襄陽の西郊外に賢者が住むと聞き、三顧の礼をもつて諸葛亮（しよかつ りよう）を迎え、天下三分の計を授かった。劉備は後に蜀の国を建てた。

その蜀と呉（こ）、魏（ぎ）の三国鼎立は長くは続かず、蜀は魏に滅ぼされた。魏から皇位を奪い取った晋（しん）の武帝は、呉をも滅ぼして天下を一つにしようとした。武帝に対して、呉の本拠地である江南に北から直線的に攻めかかるのは容易ではなく、西の襄陽から曲線的に圧迫するのが上策であると、羊祜（よう こ）が提言した。羊祜は自ら襄陽に乗り込み、周辺を豊かな穀倉地帯に変え、民を養い兵力の増強に努めた。天下統一は羊祜の死から二年後に成り、武帝は「これは羊祜の功績である」と称えた。

しかし、晋は皇族内部の泥沼の抗争と、北方民族の侵入によって、急速に弱体化し、国の北半分を失った。以降、隋（ずい）による天下統一まで、約三

百年にわたる南北朝の分裂時代が続いた。襄陽はおおむね南朝側にあったが、しばしば両朝が争い合い、北朝側に組み入れられることもあった。

孟浩然は一族の同世代の男児の中で六番目に生まれた。従兄弟らは互いに生まれの順番、すなわち排行で呼び合い、孟浩然は六郎であった。

孟一族は、勤儉な先祖の長い積み重ねと、曾祖父孟輻（もう ふく）の卓抜した統率力によって、襄陽の界限でも特に豊かな家の一つとなっていた。襄陽の南に聳える岷山（げんざん）のそのまた南の平地を孟家の土地とし、南園と呼ばれた。孟輻は人々に敬われ、南園の長者、あるいは南園老の名があった。

南園老が生まれたのは、隋の煬帝（ようだい）が即位して三年目だった。煬帝は隋の絶頂期を招来したものの、人民を酷使し過ぎてたちまち奈落の底に落ち、側近の手にかかって殺された。天下は分裂し、唐が勃興するまでの動乱期に、襄陽にも戦火が及んだ。孟輻少年の英雄的な活躍によって南園は救わ

れ、その伝統は絶えることなく唐の時代を迎えた。

南園老の功績は大きく、八十六歳で死ぬまで、身分は一介の農民でありながらも、中央から派遣された知事でさえ、一目も二目も置かずにはいられない存在であり続けた。南園の繁栄と唐の法とは必ずしも一致するものではなかった。南園老の隠然たる力をもって法に抗した。その一方で、孟一族が連綿と孟子の教えを奉じて来たことは、民の良き鑑であると為政者から見なされた。南園老は両面をもって南園の権益を守った。

南園老は七十近くになったとき、一族の主だった者を集め、宣言した。

「我等は祖父から父、父から子、子から孫へと、代々、孟子の教えを受け継いで来た。今日のこの南園の繁栄はまさしく孟子の教えの賜物である。この教えを我等一族の中だけに留めておいてはいけない。孟子は天下に王道を行うことを志した。我等も我等の繁栄を天下に広めるよう努めるべきだ。天下を見渡せば、唐の御代が果たしてこのまま安泰であるのか、いささか危惧の念を持たざるを得ない。唐の初代皇帝が長安においてお立ちになられたのは、

わしが十三歳のときであった。ここ襄陽にはそのことさえ聞こえて来ず、平穩な日がいっつ来るとも知れなかった。再びあのような時代に戻してはならない。そのために、孟子の教えを広い天下において行う者をこの家から送り出すとわしは決意した。よいか、これから生まれ来るわしの曾孫の中から才能の見込まれる者を選び、学問を授ける。一族のこれまでの蓄えを、天下のため、孟子の名を高からしめるために惜しんではならない。それが我等のためにもなるであろう」。

南園老は息子たちに血判を押させ、一族の総力を挙げて子弟を教育し、必ず文官登用試験の貢挙（こうきよ）の合格者を出すと定めた。

南園老は八十六歳の長寿を全うしただけに活力旺盛で多数の子がいた。血判状の先頭に名を記したのは長男の孟漲（もう ちよう）だった。漲は父に似ない地味な人物だった。それでも、このときの順番で、長老の後継者であることが改めて確認された。漲は南園老の力で名目上の官職を得てもいた。

南園老の息子で一人だけ血判状に欠ける者がいた。気付かなかったのでは

あるまいが、言い出す者はいなかった。末の子の孟演（もう えん）である。他の兄弟と年が大きく離れ、初めは存在さえ知られていなかった。町である若い女が死に、そこに遺された幼児が南園老の子であった。南園老はその子を南園に引き取り、十五、六歳になったころからは、南園で姿を見るのは稀になった。演がどこで何をしているのか南園老以外に知る者はいなかった。

南園老が血判状を作ったのは、天下を思うばかりではなく、曾孫の代からその先までも南園の繁栄を保つためだった。唐の法は均田制を定めていた。成人男子には国より土地が与えられ、その代わりに租庸調（そようちよう）の負担が課せられ、死ねば国に土地を返す。それに従えば南園に富が蓄積するべくもなかった。唐の国法よりも遙かに昔から続く南園の慣習を保つために、南園老はあらゆる手段を使った。漲のために名目上の官職を獲得したのもその一つだ。将来を見越しての最良の手段は、一族の誰かが朝廷の高い地位に昇ることだ。高位高官には種々の特権が授けられる。幸いにも、隋の時代から、門閥に拠らずとも高位高官に達する可能性が開けて来ていた。文官登

用試験の貢挙が隋によって始められ、唐になって試験制度が整備された。教育に投資することが、長い目で見れば、自分たちの大きな利益になる可能性があった。

血判状に込めた南園老の思いに天が応じたのか、最初の曾孫からして立派な子に恵まれた。孟漲の長男の孟敬行（もう けいこう）のところに生まれた直系の曾孫で、名は誼（ぎ）と付けられた。排行の第一は普通は大と呼ばれる。孟大は、その大の字に似合った大きな赤ん坊だった。

「我が一族からよもや大盜賊は出ないだろう。だとすれば孔子のような立派な人物になるであろう」。

大きな赤ん坊を抱いて南園老はまことに満足気であった。孔子は、同じ時代の大盜賊と間違えられたほどの偉丈夫であったので、南園老はこのように言ったのだった。

南園老は方々に人を走らせ、我が意に適う人物を求めた。孟大が四歳になるのに合わせて、一人の教師が南園にやって来た。痩せた驢馬に跨り、瀟洒

な儒服を纏い、高く聳える古風な儒帽を頭に載せて、褚(ちよ)先生は現れた。瘦身の先生は、滑稽なくらいひよる長く見えた。驢馬から降りて、長老の前で長身を二つに折り、顔を上げたとき、人々の間にかすかなどよめきが走った。眉目秀麗の語はこの先生のためにあるかのようだった。三十歳になろうとする褚先生が独り身であると聞き、ある者は、不面目な事件を起こして南園を追放されるのではないかと心配した。褚先生はその外見に反し、自他に對しこの上なく厳しかった。南園老はそこに惚れ込んだ。

褚先生の嚴格主義はその生い立ちに由来した。二歳のとき、地方の小官であった父が亡くなった。母は暮らしに困り、子を負って都に上った。夫は、朝廷の大官であった褚遂良(ちよ すいりょう)の遠い親戚に当たり、何かのときのために褚遂良宛ての手紙を書き遺していた。それを唯一の頼みとし、母は親類の糸をたぐって息子を褚遂良に引き合わせようとした。それが叶いそうになったとき、褚遂良は失脚した。

褚遂良は、唐の実質的な創始者である第二代皇帝李世民(り せいみん)に間

近で仕えていた。李世民は死に際して、息子の李治（りち）を褚遂良に託した。李治は即位して間もなく、父皇帝の後宮にいた武氏を愛するようになり、皇后を廃して武氏を皇后にしたいと考えるようになった。褚遂良は、李世民が定めた皇后を大切にしよう諫めた。皇帝は態度を硬化させ、褚遂良らの猛反対を押し切って武氏を皇后にした。それが後の則天武后（そくてんぶこう）である。則天武后は自分を拒んだ褚遂良を恨み、皇后としての地位が安定すると、罪を被せて南方に流し、褚遂良の一族をことごとく罪人にした。

褚先生の母は褚遂良の縁者であることを隠して都から逃げた。望みを失った母は逃亡の旅路で病死し、褚先生は、母の遺骸の傍らで自分も死ぬしかないと考えた。幸いにも慈悲深い僧に拾われ、持って生まれた才能がたちまち現れ出て、僧に可愛がられた。その恩に応えて師と同じ仏の道に入るべきと思いつつも、父の形見の手紙を読めば、世に出て儒の道を実践しなければならぬと考えるのだった。そのころ、李治は皇帝であつても、大方の権力は則天武后の方に集中しつつあつた。褚遂良は流された先で死に、一族はなお

官界から厳しく締め出されたままだった。則天武后が君臨する限り、褚先生には官に就ける可能性はなかった。困難であるからこそなおのこと挑まねばならないと、褚先生はひたすら学問を深めて時の来るのを待った。

則天武后は激烈な政治手法で己の権力を固め、褚先生の道はいよいよ固く閉ざされる一方だった。そこに南園老からの誘いが来て、孟子以来千年にわたって教えを受け継ぐ人々がいるということに強い感銘を覚えた。生きる活路をそこに見出そうと南園に向かった。得難い縁がここに結ばれたのだった。南園では、長い伝承のうちに、孟子本来の教えとはいささか異なる我流となり、とりわけ礼法は粗雑になっていた。褚先生は、自分の学問の全てをここで実地に活かそうとした。南園老は自ら率先して褚先生に礼法を習った。

南園の空気は肅然とし、南園老は大いに満足した。褚先生の厳格主義は、他人には傍迷惑な面もあった。習わねばならぬ窮屈な礼法も、南園老の手前、文句を言えず、不承不承ながら真似をする他はなかった。不満が噴き出る前に、褚先生は別の技でみごとに抑えた。褚先生は

士人のたしなむべき琴棋書画の全てに通じ、弓術にも優れていた。南園老が「かつてこれで寄せ来る敵と戦ったものだ」と自慢の大弓を見せたときに、楮先生はそれを引いて的を射抜いてみせた。南園の誰もが適わぬ技だった。

孟大は、その体に見合って健やかに成長した。明るく人懐こい性格で誰からも愛された。頭脳もなかなか明晰で、楮先生の最初の弟子としてまことにふさわしかった。

孟大の後にはしばらく短命な子が続き、次に乳児を超えて幼児にまで育ったのは、孟大の弟の孟諤（もう がく）だった。それが排行の二番目の孟壘で、その次の孟二ととともに、「この子等は学問には向くまい」と南園老はそっけなく、二人は楮先生のために建てられた学舎で学ぶのを許されなかった。

排行第四の孟可及（もう かきゅう）は生まれながらに端正な顔付きであった。南園老はひと目見て、「この子こそが、天が我等一族に与えてくれた宝物であ

ろう」と言った。孟四は漲の二男の敬通（けいとう）の子だ。

褚先生は孟四の誕生を祝う詩を作った。四歳の年の吉日に学問を始め、すぐに孟大を凌ぐ才能のきらめきを見せるようになった。

排行第五の子はいかにも凡庸な顔で、南園老は「すでに二人の良き子を授かり、それ以上を望むのは欲が深すぎよう」と言った。

そして六番目が孟浩然だった。南園老は八十四歳になっていた。「わしは二人で十分に満足した。あのぼんくらのところの子が生まれただけで驚きだ」と、孟浩然を見に行こうともしなかった。

孟浩然の父は、漲の三男の敬則（けいそく）で、孟一族の中でも一と言って二とは下らぬ愚か者と見られていた。孟一族の者はあまねく褚先生について礼法を習わねばならなかったのだが、敬則だけはあまりにも愚かなために除外された。しかし、不思議なことに、褚先生は道で敬則に出会うと、必ず先生の方から恭しく挨拶した。敬則は放心したようないつもの顔で挨拶を返さないことが多かったが、褚先生は柔和な笑みを浮かべて歩み去るのだった。

南園老は楮先生に勧められ、しぶしぶながら孟浩然の顔を見に行つた。ひと目で、「わしが八十を超えてこれまで生きて来たのはこの子を見るためだった」と、身を震わせた。「この老いた腕が、万一支えられぬのを恐れる」と、孟浩然を抱くのを思いとどまり、後には、「あれが生まれたときには産屋の外にまで光が溢れ出て、あまりにまぶしいのでわしは見に行つたのだ」と、相好を崩して語るのを常とした。

南園老は「また詩を作つてくれぬか」と言ったが、「私の才では及びません」と楮先生は遠慮した。「確かに難しかろうな」と南園老はさらに喜び、「この子は我が一族で最も優れた者になるに違ない。この子にふさわしい名を孟子の言葉から選んでくれ」と言い、それで浩然の名が付けられた。孟浩然の噂を聞いて、近隣の仏寺や道観から僧侶、道士が来て、口々に孟浩然を賞賛し、多大の金品を得た。

南園老は、孟大や孟四などは忘れてしまったかのように、孟浩然ばかりを可愛がった。その偏愛ぶりに、南園に若干のさざ波が立ったものの、父の敬

則は相変わらず愚かしいので、人から妬まれるまでにはならなかった。

南園老は孟浩然が三歳のときに死に、孟浩然の記憶には、南園老のことはほとんど残らなかった。

孟浩然の後も南園老の曾孫は幾人も生まれ、孟浩然と同年の孟七すなわち孟馨（もう きょう）、孟浩然の弟の孟十五すなわち孟洗然（もう せんぜん）、ずっと後になって末の叔父の孟敬規（もう けいき）とところに生まれた孟二十二すなわち孟邕（もう よう）などが、褚先生の学舎で学ぶようになった。いずれもが南園老の長男の孟漲の孫で、他のところに生まれた子供は学舎入りを認められなかった。

孟浩然が生まれた永昌元年（六八九）年に、人々の記憶に長く残った事件が都であった。唐の代が安泰であろうかと、十余年前の南園老が懸念したのが的中したかのようだった。

時の皇帝は李治の子の李旦（りたん）に代わっていた。実権はその母の則天武后にあった。則天武后は敵に対して宥赦なく、邪魔となれば、息子も殺し、臣下の命などは軽かった。

反逆を企てたとして、洛陽令の魏元忠（ぎげんちゆう）を初めとし多数の者が獄に繋がれた。獄には拷問を得意とする役人がいて、獄に曳かれた者は必ず罪を認めた。魏元忠だけは残虐な拷問にも耐えて自分を拒んだ。それでも、他の者の証言で同罪とされ、都の市場で処刑されることになった。刀が振り下ろされるよりも一瞬早く、一頭の馬が駆け込み、「罪は赦された」と叫んだ。他の罪人は狂喜した。魏元忠は全く動かず、「この忌まわしい仕置きのお離れになってよろしいのです」と促されても、「虚偽の報せかも知れません」と座り続けた。正式に勅使が到着しても、魏元忠は憂歎の色を一切表わさなかった。罪人は死を免じられて南方に流された。

その翌年、則天武后は息子を皇位から降ろし、自身が皇帝になった。国号は唐から周に改められた。

南園老は、「唐の世にはもう戻らぬのか。我が曾孫の誰かがそれを為す仕事をしてくれまいか。甦った唐の朝廷に並ぶのは浩然であろうか」と、言い残して死んだ。

長男の孟漲が南園の主となった。すでに六十歳を超え、もともとの控え目な性格もあって、父が築いたものに一切手を加えようとしなかった。一見して南園は以前と何も変わらなかった。しかし、時間が経過する限り、同じであり続けることはなく、何も変えようとしなければ、悪くなるのが必然であった。

南園に住むのは孟姓だけでも多数にのぼり、他姓も少なくなく、身分を異にする者もいた。南園老がいたからこそ南園独自の秩序が保たれていた。外に対しては、法の厳格な適用から逃れ、内に対しては、種々の労役を按配する必要があった。外側から余儀なくされる変化はなお緩慢であったが、内側では変化の兆しが種々見られるようになった。孟漲は鈍感であったが、南園老という後ろ楯を失った楮先生は敏感でなければならなかった。厳格主義を

貫き、孟子の教えと礼法による縛りをこれまで以上に強くしようとした。そして、何よりも、貢挙の合格者を出すことが肝心であると、学舎での教育に邁進した。

このころ孟大は十五歳を超えたばかりで、すでに大人以上の堂々とした体軀で、大らかに明るく振る舞っていた。しかし、見かけと違つて心は繊細で、南園の雰囲気が変わりつつあるのを感じ取っていた。順番通りなら、祖父の漲から父の敬行へ、そしていずれは自分へと南園の主の座が下りて来るのだろう。そのときまでに、自分が貢挙に合格して官人になっていけば、南園は新しい時代を迎えられると、自分に期待されているものが何であるかをよく自覚していた。

子弟の教育に財を惜しんではならないというのが血判状の文言であった。学舎の維持にはそれ相応の費用がかかり、そこに通う子は何かと優遇された。学舎は南園にとって希望をもたらずのものであると同時に、不満のもとでもあった。

褚先生は、貢拳という難関を突破するために、学舎では、競争を奨励した。年齢と関係なしに子供たちを競わせた。子の競争に、親の欲もからんだ。南園老が死んで三年もすれば、孟漲の無能ぶりは誰の目にも明らかだった。一族の大事を決めるのに、漲は慣習を守ることしか頭になかった。漲の長男の敬行も期待できそうになかった。父に向かって何もものを言わなかった。もしも誰かが孟大を差し置いて先に貢拳に合格すれば、敬行ではなく、合格者の親が次の南園の主になり、その方がまじらうと、考える連中もいた。最も強く意識したのが、孟四の父の孟敬通だった。

孟敬通は、褚先生の学舎をしばしば訪れては、「いくらでも厳しくして下さい。あれはそれに応えられる子です」と頼んだ。孟四は孟大より八歳下で、七歳で早くも孟大と甲乙つけがたい詩を作って、その評判が襄陽の町にも達した。孟四の勉強への打ち込み方は並みの子とはまるで違った。毎朝、眇を決して学舎に通った。褚先生にとって極めて教え甲斐があり、父親の申し出の通りの厳しい指導をした。

孟浩然是孟四より遅れること五年で初めて字を習った。墨をたつぷり含ませた筆を握り、褚先生の指図通りに腕を動かした。字らしきものができあがった。襄陽の町から呼ばれた術士が、それを下から見たり、裏から見たりして、筆の勢い、点の置き方、墨の黒さを仔細に吟味し、孟浩然の将来を占った。

「貢挙合格間違いなしにございます。洛陽殿（らくようでん）において、これより幾層倍も立派な字で、答案をお書きになりますよう」。

術士の言葉に、孟漲たちは喜び、褒美をたくさん与えた。術士は孟四のときにも同様にことを言って褒美を手にしていた。ただし、洛陽殿云々はこのときが初めてだった。

則天武后は皇帝になる前から、貢挙の制度を整えるのに熱心だった。即位の翌年には、貢挙の合格者を洛陽殿に集め、自身が試験官となって最終試験

を課した。後に千年以上も続くことになる皇帝直々の試験、殿試（でんし）の始まりであった。皇帝自らが試験に臨んで順位を決めるのであるから、上位で合格した者は大変な栄誉を感じた。

術士は単純に南園の人々に媚びただけであったのだろうが、その言葉は、褚先生の心を微妙に揺るがした。則天武后が権勢を振るう限り、褚先生は日の当たる場所に出られない。だから、南園老の曾孫の中から貢挙合格者を出すのを己の一生の仕事と定めた。ところが、弟子の誰かが貢挙に合格したとして、その子が則天武后に選ばれたのを名誉として、皇帝に忠節を尽くすようになったのでは、必ずしも望ましいと言えないだろう。もしも則天武后以前の唐の本来の姿に戻すことに力を尽くしてくれるのなら、自分の夢も適うのだが、則天武后への反感をあからさまにするのは危険であった。

孟浩然が初めて文字らしきものを書いたその年、南方に流されていた魏元忠が中央に返り咲いた。則天武后は皇帝になって政権が安定すると、統制を緩めるようになった。拷問を得意とする酷吏（こくり）を重用して邪魔者を徹

底的に排除して来たのだが、世間における酷吏の評判は当然ながら悪く、則天武后政権の暗い翳になっていた。

魏元忠は、都への帰還を許してくれた則天武后の真意は、泰平の世にふさわしい体制へと転換して行くことにあると考え、手始めに酷吏を追放する改革に着手した。しかし、酷吏は手強かった。魏元忠を含む宰相以下の高官を一斉に摘発して獄に繋いだ。得意の拷問で、国家の転覆を図る巨大な陰謀に加担したと、魏元忠を除く全員に白状させた。魏元忠も他と同罪とされ、皇帝の恩情によって、わずかに死を減じられて流罪となった。

褚先生は、魏元忠のような闘士を育てたいものだ、厳格主義の度をさらに強めた。孟大は立派な体に恵まれていくら厳しくても平気で、孟四は身を削って勉強に励んだ。

褚先生は、才能がより多くあると見込んだ子により多くの愛情を注ぎ、他人が見てもその序列は明らかだった。孟浩然が十歳になるまでに、第一位が孟浩然、第二位が孟四、第三位が孟大という順位が確定した。第四位以下に

は、子どもたちの成長につれて変動があっても、第三位まで不動だった。それは南園老が愛した順序そのままでもあった。

孟浩然は、自分が第一位であるのは好ましいとは感じなかった。褚先生は、他の子には見せない柔和な視線を孟浩然だけに向けた。孟浩然は、なるべくそれが自分に届かないように、褚先生から距離を置こうとした。大きな孟大の蔭に隠れると安心できた。一方で、孟四は常に褚先生の最も近くに身を置こうとしていた。

孟大は楊家（ようけ）から妻を迎えた。

褚先生は「これからは必ずしも毎日学舎に来ることはあるまい」と言った。孟家の嫡男として為すべきことが増えるであろうとの配慮だった。それでも孟大は今まで通りに必ず朝早くに学舎に顔を出した。次第に南園の用事が増えると、褚先生に挨拶してから下がるが多くなった。孟浩然には特段の

用はないのだが、孟大の後に付いて出て行き、そのまま孟大の家で過ごようになった。他の子がそのようなことをすれば、褚先生の厳しい叱責を受けねばならぬのだが、むしろ目を細めて孟浩然が去るのを眺めているのだった。

楊家からの嫁は、南園老直系の曾孫にこれよりふさわしい娘はいないとの評判で、実際に、何ができないということが一つとしてなかった。孟浩然は、楊氏を間近に見て、孟家には一人として適う者はいないと感じた。女性としての仕事ができるだけでなく、儒学の経典も史書も何でもよく読みこなしていた。楊氏並みの才があれば、貢奉などは楽々合格できるに違いないと思えた。

特に驚かされたのは楊氏が何気なく作る詩だった。褚先生から教わる難しい詩とはまるで違っていた。楊氏は「見えたままですから、これを詩といっているのかわかりません」と、身の周りにあるものを題材に、平明な言葉を並べて、誰かに見せるといふのではなく作るのだった。

狭径花将尽

細い径に花はまさに終わろうとし

閑庭竹掃淨　　静かな庭に竹が淨らかに揺れています。

この対句は十歳の孟浩然にもわかりやすく印象的だった。

そのような楊氏が、孟家の嫁として、南園特有の習慣に一日も早く溶け込もうと懸命に努め、小うるさい人々が遠慮もなしに放つひと言ひと言に気を病んでいるのを見るのは、ひどく虚しいことのように感じられた。

孟浩然は南園において何一つ不自由することなく育った。褚先生の学舎は居心地のいい場所ではなくても、勉強だけをしていられるのは大変に恵まれていることに違いないと、早くから自覚していた。孟子から一千年の間に、これだけ恵まれた境遇の子はたぶんいなかっただろう。褚先生を尊敬する気持ちは強く、遠くから長身の褚先生の姿を見ると畏敬の念を覚えた。それでも、近くにいと窮屈で逃げ出たくて仕方なかった。そのように感じてしまふ自分は悪い子であると思った。昔なら貴族の子でもなければ、褚先生のような立派な先生のもとで勉強などできるものではなかった。貢挙の試験に合格すれば、官人として活躍できるというのも、昔にはないことだった。こ

れほど恵まれている自分であるから、学問に励んで、試験に合格して、さすが孟子の子孫であると天下に名を馳す人物にならなければならぬと強く思うのが、褚先生の教えは決して楽しいものではなかった。褚先生は全てに厳格だった。「私の責務はただ一つ。南園老殿の御恩に報い、天下の民を安んじするために、孟子の教えを実際に踏み行うことのできる場へと、諸君らを導くことだ。つまりは、貢挙合格への最短の道を歩ませることにある。諸君らが刻苦奮励した結果、官界へと羽ばくならば、その向こうには広大な世界が開ける。今はそのために己に克つことが何よりも重要だ」。褚先生は、覚えて覚えて覚え抜いて骨の髄にまで染み込ませようとした。それは孟浩然には苦痛で、そう感じる自分を、よくない弟子であると思った。

忍耐強さも備える楊氏なら、貢挙に楽々合格できるであろうに、女性である楊氏にはその道は開けていない。孟家に来た嫁に求められることを、身を削つても完璧に果たそうと努めていた。

孟大には南園老の最初の曾孫として生まれたときから貢挙合格が期待され

ていた。しかし、孟浩然には、官服姿の孟大が想像できなかつた。孟大が官人になるのは南園には幸いであつても、孟大にとってよいとは思えなかつた。孟大ほど周囲に細やかな気を配る者は南園にいない。褚先生の学舎でも、年少者の面倒をよく見て、周囲に対して極めて冷淡な孟四とは対照的だつた。孟大と楊氏は互いに敬愛し合い、相手を深く気遣つているさまを見るのは孟浩然には心楽しいことであつた。孟大が官人になつたならば、二人の間は今ようではなくなつてしまふように思われた。孟大も楊氏も、より多く外の世界に気を遣わねばならなくなり、二人はまるで違つた夫婦になつてしまふのかもしれない。それは悲しい。貢挙に合格するのは、孟大ではなくて、孟四かさもなれば自分であるべきだと、孟浩然は考え、勉強に励まないとならないと強いて思ふのだつた。

孟浩然が十三歳のころであつた。

父は畑の隅に立っていた。岷山の方に向かって、何をするのでもなくじつと立ったままであるのが父の常であった。そうなったら、誰が声を掛けても微動だにせず、ただ妻が「ほれ、ほれ」と背を叩いたときにだけ反応し、のっそりと動き出すのだった。

父のそうした姿に、孟浩然は生まれたときから見慣れていた。普段は何も思わずに脇を通り過ぎるのだが、このときは、ふと気になって、父の斜め後ろに歩み寄り、同じように岷山に体を向けてみた。山はいつもと変わらずにあった。

父はじつと動かずに立っていて、父の真似をするのは意外と辛抱を必要とした。父は何を見ているのか、何を考えているのかと、その背後からさぐってみようと思ったのは、始めのうちだけで、だんだんと辛抱しているだけで精一杯になり、そのうちそれも面倒になった。

ゆつくりと日が西に傾いて、俄かに雲が流れて来た。その影が形を変えながら山巒を走り抜けた。孟浩然の心が活気づいた。雲は次々に現れた。それ

は次第に灰色を帯び、ついには黒くなって、峰に雨脚が降りそそぐのが、夕日に照らされてくつきりと見えた。

この見ているものを、何か言葉で言い表したいと思った。しかし、どのようにしたらいいのかわからなかった。

父はこれを見て、何を思っているのだろうか。

不意に、足元から冷気が立ち昇って来た。畑に立っていないながら、全身が山の緑の中に包み込まれるような気がした。言い知れぬものが心に訪れた。それが何であるのかわからなかった。それをどのように言ったらいいのかもわからなかった。

孟浩然はこらえられず、声を出した。

自有宇宙　宇宙があつてから

便有此山　この山はある。

孟浩然の突然の声に父はびくりともしなかった。

孟浩然は前に回った。

父の目はただ峴山に注がれていた。父も同じものを見て、同じように感じたはずだ。

「父上は悲しくないのでしょうか。羊祜は峴山に登って何を悲しまれたのでしょうか」。

孟浩然は尋ねた。何の応答もなかった。

晋による天下統一の礎を築くために襄陽に来ていた羊祜は、ある日のこと、峴山に登った。山頂に立った羊祜の変化に、同行した鄒潤甫（すう じゅんぽう）が気付いた。「公の治徳は四海に冠たるものがございます。そればかりか、前哲の教えを嗣いで学問の道も究めておられます。公の御名はこの山のように、八方より望まれ、永遠に伝えられるでありましょうに、何故に、そのような御苦悶をお顔に浮かべておられるのでしょうか」。羊祜は答えた。「宇宙はいつからあるのだろうか。宇宙があったその最初からこの山はあったのだろうか。我等が決して知り得ぬ遠い昔より、数え切れぬ賢達勝士がここに登って、ここからの景色を遠望したであろう。我等の前には無限の時があり、無数の

賢達勝士がいた。我等の後ろにも無限の時があり、無数の賢達勝士がいる。いまここで、その誰を見るのか。前の人を見ず、後ろの人を見ない。これを悲しまずにいられようか」。

羊祐ほどの輝かしい実績を残した人は稀だ。その羊祐にも悲しみがあつた。孟浩然には、生まれたときに歩むべき明瞭な一本の道が用意されていた。

南園老が子孫に願ったのは、あるうことなら羊祐のようになることだ。その道を行くことに疑念を持つのではない。それでも、別の道が存在しているのを知らないではない。身近にはこの父がいる。

父は息子がそこに立っているのにも気付かぬように山に向かい続けた。日が隠れて、雨がここにも降り落ちて来た。

母が現れて、夫の背を叩いた。

「ほれ、ほれ」

父はのっそりと動き出した。

孟浩然は母に尋ねた。

「父上はいつからこのようなのでしょうか。」

母は笑った。

「きっとあの岷山ができる前からなのでしょう。いつもああして立っているものだから、ならば見てもらえるのではないかと、岷山がによきによきと生えて来たのでしょうか。」

■ 書懷貽京邑故人

開元六（七二八）年、孟浩然二十歳。

自分の思いを詩に託して、都の友人に送った。官職を求める思いはこのころ最も強烈であった。

唯先自鄒魯 先祖が孟子や孔子の故郷にいたころから

家世重儒風 家は代々儒教を重んじ

詩礼襲遺訓 詩経や礼記を遺訓として習って

趨庭露未窮
晝夜恒自強
詞翰頗亦巧
三十既成立
吁嗟命不通
慈親向羸老
喜懼在深衷
甘脆朝不足
簞瓢夕屢空
執鞭慕夫子
捧檄懷毛公
感激遂彈冠

父から子へと窮まることなく伝えられてきました。
私は昼も夜もつねに自らを励まして

詩も文章もなかなか巧みになり

三十歳で学も十分に成就しましたのに

運命というものは思い通りになりません。

恵み深い親は老いに向かいつつあり

その年齢を思いますと深い愁いのもととなります。

朝の膳には美味を載せられず

夕餉にはしばしば何もないありさまです。

父母のためならいかなる労働も厭わないと言った孔子を

慕い

母の前では官に召されるのを敢えて喜んでみせた毛公を

懐きます。

意気通じ合う方からのお誘いがあれば必ず仕官するのが

よく

安能守固窮

郷里で孤高を保っているべきではないのでしよう。

当途訴知己

世の大事なお仕事をさされている皆様に訴えますのは

投刺匪求蒙

私を売り込むためだけではないのです。

秦楚邈離異

我が郷土は都から遥かに離れています

翻飛何日同

いつの日にか皆様とともに天下のために身を捧げたいの

です。

■ 題大禹義公房

最初の上京の後、江南を旅し、会稽（かいけい）の大禹寺（たいうじ）で義

公なる人物に会った。義公はその地の名士であろうか。

義公習禪処

義公殿が禪を習うここは

結構依空林

からりと開けた林に寄り添う建物。

戸外一峰秀

戸の外に一つの峰が高く突き出し

階前群壑深 階の前から谷が深く落ちていきます。
夕陽照雨足 遠くで雨脚が夕陽に照らされますと
空翠落庭陰 山の緑がふつと庭の片隅に落ちます。
看取蓮華淨 そのときに蓮華の浄らかさが見てとれて
応知不染心 何ものにも染まらない心が知れます。

■ 澗南即事貽皎上人

澗とは川。ここである澗南は漢水の南すなわち南園のあたりを指す。
皎(きょう)上人という知り合いの僧に平生の思いを詠んで贈った。旅
から帰り、訪ねて来た李白と初めて会ったころの作であろうか。
弊廬在郭外 傷んだ家は町から離れたところにあり
素産唯田園 生きる糧は田園から得るものだけです。
左右林野曠 あたりに林や野が広がり
不聞朝市喧 名利を争う喧噪は聞えて来ません。

釣竿垂北澗

北の川で釣り竿を垂れ

樵唱入南軒

南の軒で樵が歌うの聞きます。

書取幽棲事

詩文に書きますのは静かな住まいのことだけ

将尋静者論

静浄の道を得られた貴僧のお話をお聞きしたくなりま
した。

■ 与諸子登峴山

一族の若輩の者を連れて峴山に登ったときの詩。晩年の作であろうか。

峴山からは見えぬ雲夢沢（うんぼうたく）を想いつつ、自分の生涯を顧み

たのであろう。

人事有代謝

人の世というものはこもごも入れ替わり

往来成古今

往き来するうちに今が昔となります。

江山留勝迹

川や山の変わらぬ美しさを見ようと

我輩復登臨

私たちはまたこの山を登りました。

水落魚梁淺
天寒夢沢深

川の水が落ちたこの時期に、近くの魚梁州は浅く見え
天の寒くなつたこの季節に、遙か雲夢沢の深まりが想像
されます。

羊公碑字在
読罷涙霑襟

羊公の碑にありありと刻まれているこの文字を
読み終わると襟が涙に濡れます。